様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年３月３１日現在

機関番号：３２６３８
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００８年度　～２０１０年度
課題番号：２０５２０２４２
研究課題名（和文）
オニール演劇における「母」の主題と脱西洋近代思想の展開
研究課題名（英文）
The Theme of the Mother and the Development of Postmodern Western Thought in the Plays of Eugene O' Neill

研究代表者
大森　裕二（Yuji Omori）
拓殖大学･工学部･准教授
研究者番号：４０３８４６９８

研究成果の概要（和文）：ユージーン・オニールの演劇作品に頻出する「母」の主題は、従来自伝的に理解されることが多かったが、実のところそれは、西洋近代の父権文化の中で貶められてきた「母なるもの」復権の主題と分かちがたく結びついている。そのことを代表作『夜への長い旅路』において具体的に検証した論考を発表した。また、『夜への長い旅路』と並ぶオニールの大作『氷屋来たる』においては、「母」なる存在の庇護のない環境に育った主人公ヒッキーの妻殺しの物語を、現代の悲喜劇として簡潔に論じたエッセイを発表した。

研究成果の概要（英文）：Although “mothers” in Eugene O'Neill's plays have been understood autobiographically in most cases, they are deeply related to the theme of the re-empowerment of the Mother disrespected in modern patriarchal culture in the West. In an article published during this research project, I discussed it in his most “autobiographical” play, *Long Day's Journey into Night*. I also published a brief essay about *The Iceman Cometh*. The life of its main character Hickey, who was brought up without any proper protection of the Mother and eventually killed his wife, was analyzed as a tragicomedy reflecting the modern Motherless world in the essay.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	700,000	210,000	910,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
２０１０年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：アメリカ演劇
科研費の分科・細目：文学・英米英語圏文学

キーワード：Eugene O'Neill, アメリカ演劇

１．研究開始当初の背景

オニールの主要作品群には「母」の主題がしばしば見られる。この主題の故に従来オニールは、フェミニスト批評家から女性を母親役に閉じ込める性差別主義的男性作家として批判されることも多かった。しかし、オニールの真意は、西洋近代の父権文化の中で貶められてきた「母なるもの」復権の道を模索することにあったと筆者には思われる。

ニーチェ、ショーペンハウエル、マルクスなど多岐に渡るオニールの思想遍歴の中でも、タオイズムや仏教等の東洋思想に彼が並々ならぬ関心を寄せたことは、オニール作品における「母」の主題の重要性を傍証するものとして注目に値する。なぜなら「母なるもの」は東洋的世界観においては重要な位置を占めるからである。オニール演劇における東洋思想について論じた従来の研究では、「母」の主題と東洋思想の関係性については全く論じられていない。近年アメリカでも仏教を始めとする東洋思想への理解は相当深まっているが、残念ながらオニール研究においてはそれがまだ十分に反映されていないのである。日本人オニール研究者としてぜひとも自らの手で上記の関係性を明らかにしたいと考えたのが、研究開始当初の背景である。

２．研究の目的

本研究の目的は、ユージーン・オニール（Eugene O'Neill）演劇における「母」の主題を、脱西洋近代を目指した作者の思想全般のコンテクストに正当に位置づけ、主要作品群を詳細に分析することである。従来オニール演劇における「母」の主題は、モルヒネ中毒を患っていた作者の母エラをめぐる不幸な体験が理想的母親像をオニールに求めさせるのだ、といった短絡的な発想にどうしても縛られてしまい、そこに当然あるはずのオニールの作家としての思想性は十分に検討されてこなかった。「母」の主題をオニールの脱西洋近代思想、特にその思想展開において重要な一翼を担った東洋的世界観との関係性において論じることで、「母」の主題をめぐる上記のような従来の研究の歪みを修正することを目指す。

３．研究の方法

(1) オニールが実際に読んだ東洋関連書籍とその時期等については、不明な部分も多い。オニールが影響を受けたとされる先輩劇作家等の著作の読書歴に関しても同様である。これらを明らかにするため、米国の大学図書館などが所蔵するオニール関連貴重資料の調査を行なう。

(2) 聖母マリア、タオイズム、仏教、ユングなど「母」の主題ないし「東洋思想」に関する文献の収集・調査を進める。特にタオイズムは、「母」（玄牝）もしくは「水」がその哲学の根本原理である「道」の形而下のシンボルとされている点において、オニールの演劇宇宙との親近性は予想以上に深い。なぜならそこではしばしば「海」の世界が極めて重要な象徴性を帯びて配置されるからである。また、東洋的世界観の一つの大きな芸術的・演劇的達成とも言える日本能演劇についても文献の収集・調査を進める。

(3) 東洋への作者の関心が最も明らかな中期マイナー劇群、*Long Day's Journey into*

Night を筆頭に伝記色の濃い後期タオ・ハウス劇群、「母」の主題が最も明らかな中期傑作劇群を筆頭に、オニール作品の精読調査を行う。また Strindberg, Ibsen, Yeats, Glaspell, Wilder, Williams, Albee, Shepard などを中心にオニール周辺の作家の作品・研究書等も可能な限り多く収集・精読調査する他、オニールの脱西洋近代思想形成において多大な影響を与えたマルクス、ニーチェ、ショーペンハウエル等の思想関連書の収集・通読も進める。

４．研究成果

(1) オニール演劇の最高峰と目される自伝劇『夜への長い旅路』(*Long Day's Journey into Night*)についての論考を執筆・公表した（共著『「語り」の諸相』所収）。要旨は以下の通りである――最初期の一幕劇『霧』(*Fog*)幕切れに登場する死せる母子像から晩年の『日陰者に照る月』(*A Moon for the Misbegotten*)の「ピエタ」の場面に至るまで、オニールはおよそ幸福のイメージとは程遠い、負の母子像を繰り返し描いてきた。「万物の母に抱かれた幼子」を至福の人間像とするタオイズムの世界観に照らして考えれば、こうしたオニールの母子像は西洋近代の父権的文化状況を反映した陰画的母子像と言えるだろう。『旅路』に登場する母と息子、すなわちモルヒネ中毒を患うティロウン家の母メアリーとジェイミーとエドマンドの息子たちもこの系譜に属していると言える。エドマンドが「たましいの病」と考えられた肺結核を発症することには、現代における人間の霊性の危機的状況が反映されている。そして母メアリーが病を克服するのは、彼女自身が語っている通り、息子エドマンドが「元気で幸せで立派になる」ときである。その母メアリーの再生には、「母なるもの」復権を通じての現代人の霊的復活ヴィジョンが託されているのである。そのことを明らかにするとともに、20世紀モダニズム演劇に共通する「語りの演劇」としての本作品の特徴を、日本能演劇との構造上の共鳴を探りながら論じた。

なお、この論考を一部改訂した英文論文を公表するべく、現在準備中である。

(2) 『夜への長い旅路』と並ぶオニール後期の大作『氷屋来たる』(*The Iceman Cometh*) については、主にマルクス主義思想やアナーキズムの思想潮流との関連を意識しながら、文献の収集・通読に当たった。その成果の一部を二回に亘る連載エッセイ「悪党たちのオニール演劇」として簡潔にまとめ、演劇雑誌に寄稿した。母なる存在の庇護のない環境に育った主人公ヒッキーの妻殺しの物語を、倹約と貯蓄を尊ぶ貪欲社会のエートスに馴染み切れなかった人間の悲喜劇としての側面から論じた。また、同エッセイでは、小品ながら高い完成度を誇る一幕劇 *Hughie*についても論じた。市民(ブルジョア)社会の周縁に生きる影の如き反規範的存在であるはずの賭博師・放蕩者の主人公エリーが、自己拡大を至上目的として生産と蓄積を繰り返す資本主義世界への奇妙な批判者たり得ている有り様を、彼が示す「贈与の精神」を切り口に論じた。『氷屋』については、この連載エッセイを核に、より大きな論文としてまとめるための準備を進めているところである。

(3) この他に、本研究期間中には、オニール初期の代表作の一つ『アンナ・クリスティ』についての英文論考を公表した。また、オニールとオニール以降のアメリカ劇作家作品

との関連を探る調査を進める過程の派生的成果として、Tennessee Williams の後期の最重要作品 *Out Cry* の翻訳を出版した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

(1) 大森裕二著「悪党たちのオニール演劇②：賭博師エリーの友情」『テアトロ』1 月号(2011) 62-63, 査読無

(2) 大森裕二著「悪党たちのオニール演劇①：妻殺しヒッキーの善行？」『テアトロ』12 月号（2010）62-63, 査読無

(3) Yuji Omori, The Poetics of the Sea and the Land in Eugene O'Neill's "*Anna Christie*" (2010) 83-93, 査読有

〔図書〕（計２件）

(1) 大森裕二訳、テネシー・ウィリアムズ『さけび』（カモミール社、2010 年）

(2) 長田光展、大森裕二、他 7 名著（2 番目）『「語り」の諸相：演劇・小説・文化とナラティヴ』（中央大学出版部、2009 年）査読無

６．研究組織

(1)研究代表者

大森　裕二（Yuji Omori）

拓殖大学・工学部・准教授

研究者番号：４０３８４６９８